

四章 最悪の落ちこみ

黒唄鳥（くろうたどり）が庭の芝まじりの土の上を、のんきそうにピョンピョン跳（は）ねては、みみずをつつついている。イタリア名メルロというこの鳥は、ウチの猫の餌食になるくらい太平楽でとろい。赤胸の駒鳥が細いほそい脚でこれも現れ、黒白の四十雀（しじゅうから）も、生垣やもみの樹の枝のあいだを上になり下になりしてチヨロチヨロしている。外に出れば、ツィー、ツィー、と意外にきれいな声で鳴いているのが聞こえるだろう。

しかし今のわたしにその気力はない。イタリア語で言う「扉から鼻も出さない」ような家に閉じこもった日が、もうひと月近く続いている。抗がん剤はがん細胞を破壊するが、同時に正常な細胞をも痛めつけてしまう。その毒が蓄積し、3回目の点滴以降疲労感がとれないのである。家事は台所仕事をかたづけるのが精一杯で、洗濯は夫がしてくれる。掃除は、居間と台所の床を掃くくらいのもものだから、週1で掃除に来てくれるシルヴィアでなければ、わたしか夫、子どもたちの誰かがする。買い物は、これも副作用で足の裏がジンジンチリチリとくるのがひどくなり、100メートルも歩けなくなつてから、出なくなった。

アレーゼには、毎週土曜日の午前中に数十台のトラックが来て、500メートルほどの通りひとつの両側に荷台を開き、野菜や魚、肉、お菓子に衣料・日用品が屋台のようにずらりと並ぶメルカート（市場）となる。わたしたちはほぼ毎週行っていた。野菜はスーパーより新鮮だし、魚に至ってはこのメルカート以外では、新鮮なものが手に入らなかった。外を歩きながら買うのも楽しい。

一度などは、その市場に行くために夫が自転車の荷台にわたしを乗せて、イタリア語で「気違い栗」と呼ばれるマロニエや、カナダ楓に似た大きな楓の枯葉をがさごそと踏みしだきながら、押して歩いてくれた。まさに身体障害者である。夫の優しさは涙が出るほどありがたかったが、寒いのとひとが

見るのには参った。以前なら週末にはたいてい家族で釣堀に行ったり散歩に出たりしていたのだが、今では歩くところではないし、体力が落ちては、釣堀に行っても車の中で寝ている始末である。

たまにイタリア人のルチアが電話をくれ、フランス人のマルティンが様子を見にのぞいてくれるが、ほかの友だちは一通り心配してくれたあとは、わたしの休養を妨げては、という思いやりもあってだろう、夕飯配達サービス以外に訪れるひとも少ない。去年までは、イタリア語の勉強に国際クラブの行事、計画、オーボエのレッスン、コンサートと毎日のように出歩いたりひとが来ていたりしていたのと比べると、雲泥の差である。

11 月初めの国際クラブの例会には、風が冷たいなと思いながら、大判のスクarfを巻いて久しぶりにおしゃれをして出て、坊主頭をさらして今までの闘病の経過と、誰にでも可能性があることだからと自己検診法の説明を英語でしたら、50 人ほどの出席者のあいだに一言の私語もなく、子どもも騒がず、緊張と集中感があふれていた。役員をしていた時分には、挨拶や行事説明のあいだいかにして私語を防ぐかに頭を悩ましたものだが、話題が話題とはいえ、これほどの「謹聴」はかつて経験したことがなかった。そして、手で触って腫瘍がどこにあるかわからなくなったと告げたときには拍手がわき、

「乞食と役者は 3 日やったらやめられないと言うが……その気持ち、うん、わかる、ねえ」

というほどいい気分だったのが嘘のようだ。

時期もよくなかった。緯度が高いため、秋から冬にかけて北イタリアは暗い。日本では太陽の国、というイメージがあるが、ナポリやシチリアなどの南部はともかく、ミラノは日本でいうと北海道をはるかとおり越して樺太くらいの高緯度になるので、晴天の日でも陽（ひ）ざしが弱々しい。ふとんは干せない。ミラノ名物の霧が出た日には、片道二車線の道で通りの反対側がまったく見えなくなるくらいだから、服を干してもじっとりと湿気を含んでしまう。洗濯物を外に 3 日干しても乾かなかったので外干しは諦めた。代わ

りに家の中の階段の上の手すりに紐を張り、ずらりと 6 人分の洗濯物を吊っている。おまけにアルプス山脈の南の巨大な盆地とあってミラノには風が絶え、イタリア人は環境汚染にひどく鈍感なもので、冬は排気ガスに暖房装置からの煙が重なり、スモッグが町を覆う。警報が出る日もある。タンジェンツィアーレと呼ばれる準高速道路のようなミラノの周りをぐるりと 1 周する道路を走っていると、道路の外側は空気がまだ澄んでいるが、内側は汚い黒っぽい空気が、ミラノの上空だけに巨大な帽子のようにかぶさっているのがはっきりわかる。

余計暗い。

1 日中どんよりとしていて、わたしは基本的にイタリアが大好きだが、これだけはかなわない、と思うのが秋から冬の暗さである。気持ちが落ちこんで、毎年鬱（うつ）っぽくなるのだ。今年はそのうえ闘病中で、気候には慣れたといっても、いいものではない。

駒鳥の夢

知ってる？

今朝きみの夢を見たんだ

外は白く霜のおりた生垣に

赤い胸の駒鳥が訪れ

わたしは暖かいふとんのなかで

うとうととまどろんでいた

きみはラジオでしゃべってた

ああ きみの声だ

もうじきここへ来るんだ

いっしょに出かけるから

そう思って眼を覚まして
茶色いセーターに琥珀（こはく）の耳飾りをつけたら
きみが来ていた
わたしの育った
明るくて古い木の部屋だった

すると
きみにこの夢のことを語りたいなと思い
でも口に出すことはないだろうと
しずかに泣いたのは
いったいいつの夢だったのだろうか？

きみも
わたしの夢をみることがあるのだろうか
わたしに語らぬままに

そして白く凍った池の底に
夢をみんな閉じこめるのだろうか

それとも
ハーブシコードの音にのせて
町中の通りに響きわたるように
高らかに歌いあげるのだろうか

それとも
わたしが逝った後

糸のような三日月の晩
夢でわたしに逢って
ひとりむせび泣くのだろうか

知ってる？
きみのことを想っては
告げなかったことが
こんなにたくさんあるんだよ？

1 日が長い。

本を読む。日ごろから年間 100 冊は読むが、それも 1 週間 2 冊のペースだから楽しいので、1 週間に 10 冊も読めば飽きる。英語の本もイタリア語の新聞も、体力が落ちていると手にとる気にもならない。母国語しか受けつけない。

残る時間つぶしはコンピュータの一人遊びのトランプゲームだが、からだを真直ぐに保てず、椅子からずり落ちそうな格好でやっている、まさにかからだ中の細胞が、あちらでもこちらでも音をたててポロポロと壊れて死んでいくのが実感されるようなだるさである。

煙草も増えた。元々「ライトスモーカー」で、一番軽い煙草を、吸わない日もあれば多くても日に 5 本程度しか吸わなかったのだが、毎晩コンピュータの前に座りこんで、夜中の 2 時、3 時まで自棄（やけ）のやんばちでゲームをやっていたら、煙も絶えない。亭主は「俺を愛しているなら煙草をやめてくれ」と言う。乳がんで怖いのは乳がんそのものよりも、その後のほかの場所への転移なのである。特に骨、肝臓、そして肺。いくら軽い煙草を少量といっても、吸っていれば吸わないよりは肺がんの可能性が高くなる。その理屈はわかるが、この暗くしんどい時期に、「煙草でもふかさなけりゃやっ

てられっか、おい」というのが正直なところで、禁煙する気にはとうていなれなかった。結果体調は悪化しているにちがいない。しかし、どう思っても、「今だけはほっといてくれ」という心境だった。

そして体力が落ちれば気力も萎（な）える。

悪い知らせも重なった。夫が勤め先の製薬会社から持ち帰ったイタリア語の雑誌によると、イタリアにおける乳がん患者の5年生存率は71%であるという。これを高いとみるか低いとみるか。

もし29%に入ったら。

わたし自身の人生はまだいい。ひと並み以上にいろんなことに挑戦し、やりたいことはおおかたやった。喜びも哀しみも十分に味わった。自分の人生には満足している。しかし5年後、末娘はまだ12歳、その上に15歳の次男と17歳の長女、長男でさえ19歳でしかない。思春期の難しい年ごろから、ひとりだちするまでまだまだ間がある年ごろである。とても、とても、おいては、逝（ゆ）けない。

そして亭主。もしもそうになったら、心残りで逝くわたしと、弱っていくわたしを日々見守り、その後はわたし無しに、4人の子どもを抱えて生きていかなければならない亭主と、いったいどちらが辛いだろう。

わたしは1週間ゲームをしながら独（ひと）りぼろぼろと泣いた。

もちろん、これは日本に比べて乳がんそのものの発生が格段に多いイタリアでの数字で、抗がん剤の効き方にも人種差があり、日本人のほうが少ない用量でよく効くそうだから、この数字が信頼できるものであっても、一概にわたしにあてはまるわけではない。それに71%に入るか29%に入るかは、生きてみなければわからない。そういう意味ではこれはただの無意味な数字である。しかし、そういう「達観」の境地に達することができたのは、1週間泣いたあとであった。

しばらくあとの話になるが、この医学的用語の「生存率」なるものは、素人の感覚では「非再発率」とでもいうべきものであることが判明した。夫が

ふとそう言ったのだ。

「何ね？ 英語でサバイバル、イタリア語でソプラヴィヴェンツァて言うたら『生き残り』っちゅう意味やないの」

「そうなんだけどね、専門用語では意味が違うんだよ。5年生存率、って言ったら5年間再発しなかったひとの割合なんだよ。だいたいそんな死ぬわけないだろ」

わたしは呆（あき）れた。意味が違い過ぎる。

「でも、若いときのがんは進行が早いから、40代で死んだなんてぼろぼろ聞くじゃない。そんなもんかな、って思うわよ」

「あのね、乳がんは閉経後の白人女性の5人に1人、っていうくらい多い病気なんだよ。それが5年で3割ずつ死んでたら、ヨーロッパに女はいなくなっちゃうよ」

「……で、あんた、それ知ってたの？」

「そりゃ商売だからね」

「なんでわたしに言わなかったのよ！ あたしや死ぬ覚悟をして泣いてたんだよ！」

要は夫がそこまで気がまわらなかった、ということらしく、わたしが真実を知ったときはもう「悟りを開いた」あとだったが、ひと騒がせな話である。わたしは英語の翻訳をひと月したことがあるから、駆け出しでもプロというかセミプロのつもりでいるのだが、そんなことは知らなかった。そう言うと、ジャンフランコの妻で、わたしの友だちのダーリーンが笑った。

「マドカ、わたし英語は母国語よ。言ったらあなたより英語はよく知ってるのよ。それでもやっぱり知らなかったわ」

あとになっては笑い話だが、そのころのわたしは「死ぬ確率」だと信じ、ただ打ちのめされていた。

もうひとつの悪い知らせは、3週間ごとに4回の点滴という前期が終わって後期の化学療法に移る際に、久しぶりにマンモグラフィつまり乳房のレ

レントゲン写真を撮ったら、腫瘍は全然小さくなってなかったことだった。

治療に入る前に医者の方から、必ずしも全部の患者に効くわけではない、との説明は受けていたが、なにせ触診では確実に小さくなり、医者もわたしも触ってまったくわからなくなるくらいになっていたのだ。全部小さくなったと思うではないか！

実際のところは、夫の説明によると、腫瘍というのはいわば桃や杏（あんず）の実のようなもので、柔らかい果肉の部分と硬い大きな種の部分とに分かれ、果肉の部分は触るとわかるが写真には写らず、種の部分は、そこから四方八方に突き出した刺（とげ）とともに、素人目にもはっきりと写真でわかる。だからわたしの場合、果肉の部分は、触ってもわからなくなったのだから確かになくなった、あるいはかなり減少したのだが、種の部分、つまり芯は小さくならなかったのだ。

ついでに言うと、わたしが見つけたしこりが日本で7月にがんであろうと強く疑われたのは、触診での医者感触と、レントゲンならびに超音波の写真で、しこりとしこり以外との境界線がきわめてあいまいなこと、さらにしこりに棘があったことで、ほかにあった、乳腺のカルシウムがたまってできた無害なしこりでは境界線が非常にはっきりしていたのと対照的であった。この境界線のあいまいさと棘は、がん細胞が周りにどんどん広がっていている証拠なのだ。診断を決定するとどめは細胞診といって、しこりにぐいぐい注射針を突き刺して組織をとり、検査した結果である。

イタリアではさらに治療に入る前、9月にビオプシア（英語でバイオプシー）、日本語で言う生検（せいけん）を受けた。胸に麻酔注射をしておいて1センチくらいメスで切り目をいれ、5ミリくらいの太さの極太の注射針を、ピストルの引きがねをひくように、ばね仕掛けでしこりに打ちこんでは引き抜くのだが、方向を変えてはそれを5、6回繰り返す。組織をとり、培養して腫瘍が悪性かどうか調べるのだ。好奇心旺盛なわたしはその針が打ち出される様子を見ていたら、見ないときより痛かった。「あなたが見るから痛いよ、ハイこっち向いて」と看護師がにっこり笑い、医者は「あなた歳はい

くつ、イタリアに何年いるの」などと話をして患者の気をそらしてくれる。わたしも2回見たら気がすんだ。

この生検は結構こたえた。部分麻酔でも痛みが鋭く、6回目は、「まだやるの！」と叫んで、「うん、検査するほうがやかましく言うんだよ、これで終わりだからね」となだめられ、ビーカーに入った液体の中に、色形といい大きさといいまるで糸ミミズのような「わたしの細胞」が漂っているのを見せてもらった。妙な代物であり、妙な感じだった。その後30分くらい軽いショック状態のようなものにおちいていた感がある。気丈なつもりのわたしだが、それほどでもなかったか、それとも麻酔の後遺症か。車を運転して帰りながら、なんだかふわふわと雲の上でも歩いているような頼りなさだった。

話を12月5日のレントゲン写真に戻そう。

写真に写った腫瘍が9月の写真とまったく同じ大きさなのを見て、がっくりくるわたしに、レントゲン科の医者が、腫瘍を木にたとえて説明してくれた。写真に写らない葉っぱの部分はなくなったけれど、枝や幹は小さくならなかったわけだと。わたしが、桃の実の果肉はなくなって、種は変わらないようなものか、と問いなおすとそうだと言う。夫は、しかし、どんどん広がっていく攻撃的な部分は果肉の部分だから、それが消えただけでも化学療法の効果はあったんだよ、と冷静に解説する。ほら、ジャンフランコも種の部分が小さくなるのはあまり期待するなと言っていたらろう？ と臨床にたずさわる友人のことばを思い出させる。

あんなに辛い思いをしたのに、全然芯が小さくなっていないなんて。

またわたしはぼろぼろと泣いた。

泣いていると、鼻水が妙にすぐにポタッと落ちる。不思議に思って鏡を覗（のぞ）いてみると、鼻の穴がばかに白く、広い。抜けたのは髪の毛だけでなく、眉毛や鼻毛もだったのだ。おかげで、鼻水が鼻の穴の中に留まることがなくすぐに落ちてくる。寒いところに出ても同じ。鼻毛がないだけで鼻水の落ち方が違うのだ。

悲しいなかで、これは珍妙なおかしさであった。

鼻毛まで抜ける！

人生なんてそんなものだ。どんな状況だって、ひとつやふたつ、笑えることはあるものなのだ。高校生のころ読んだ、エリヒ・パウル・レマルクというドイツ人の書いた『西部戦線異状なし』という本を思い出す。戦争の最前線という、わたしとは比較にならない過酷さのなかでも笑いころげるシーンがあり、そこで、「どんな悲惨な状況のなかでも、笑えることはあるものだ」と主人公は思う。

このことばはその後、折に触れてわたしの支えになり、辛い時期でも生活を明るくしようとするために役立った。

2期目の化学療法は1期目の薬ほど強くないので、これ以上腫瘍が小さくならず、したがって期待していた部分切除ではなく、乳房を全部取り除かなければならなくなる可能性が高い。主治医に聞くと可能性が高いとは言わず、可能性があると云ったが、わたしとしてはそれを受け入れるのに心の準備が必要である。乳房再建手術をするならどんなものかと尋ねてみると、「摘出するやいなや同じ日に引き続いて仮の乳房をつけ、半年か1年後に本手術をおこなうやりかたと、摘出してひと月ほどたってから再建するやり方とあり、美容的には前者のほうが優れている、ま、詳しいことは手術する形成外科医に聞いてよ」とわりに素っ気ない。

主治医自身は腫瘍科医である。だから形成外科領域には詳しくない。レントゲンの説明でもそうだが、ここでは分業が徹底している。9月に腫瘍の大きさを決定したのも主治医ではなく放射線科の医者で、判定が主治医と放射線医とで分かれたときも、主治医は放射線医に尋ねなおした。日本なら外科である主治医が全部判断し、説明するのではあるまいか。

このころは副作用が最高潮に達していて、疲労感だけでなく、病院内を採血室からレントゲン室、診察室、と移動するのも足ジンジンがひどくて、おそろしくゆっくりとしか歩けなかった。ひとが珍しげにじっと見つめて、

さぞや重病人と思うのか、扉を開けてくれる。この足ジンジンが始まったのは最初の点滴の1週間後で、次の点滴の1週間後に悪化し、3回目の点滴のあとはもっとひどくなった。つまり、「毒」が蓄積していつているのだ。4回目のあとは、ほとんど歩けなくなるのではないか、という恐怖感があった。はじめの9月に入った毒が消え始めない限り、この副作用は軽くなりようがない。足だけでなく掌にもジンジンチリチリが出てきて、料理や衣類の整理でさえ、しばしば中断せざるを得なかった。

「ほんとに、なんにもできないわ。何にもよ。いったいいつになったら軽くなり始めるのよ!」

イタリア人のように腕を振り回して唾(つば)をとばし、医者に詰め寄る。先が見えないというのはまことに辛かった。

「いつ、と言われても困るけど、必ず軽くなるから。もうこの薬は終わりにんだから、これ以上ひどくはならないから、ね」

患者をなだめるのも医者の仕事のひとつとは言え、副作用に個人差がある以上、確答はできない。愛想なしの主治医の女医はそっぽを向き、若い男女2人の医者が同席するうち、イタリアらしく男性のほうがしきりにわたしを慰めようとする。

「そんなこと言ったらって買い物にも行けないし、オーボエも吹けない、クリスマス前のコンサートも全部おじゃんよ!」と盛大に愚痴ると、

「なんだ、それは？」

「わたしはクラシック音楽が大好きで、イタリアに来てからオーボエを習い始めたのよ。それが化学療法を始めてからは体力がないからで吹けないでしょう。でもそれはまだいいわ、終わったらまた吹き始めるから。でもね、コンサートにもう半年も行ってないのよ。去年の今ごろなら週に2回は行っていたのに。バッハの宗教音楽を聴くならクリスマス前か復活祭前が一番、それがこの調子ならせっかくミラノにいながら1回もコンサートに行かずに今年が終わるわ!」

ここまで来ると医者の領分ではない。あら、そう、てなもんである。

この暗かった時期に、西洋人が口をそろえて言うのは、「マドカ泣いてよかったわね」という台詞（せりふ）だった。泣いて泣いて悲しみや絶望を発散したら、あと楽になるでしょ、泣かなかったらいつまでも胸の中にたまっていて、苦しさはつものばかりよね、と、イタリア人もフランス人も南アフリカ共和国人も異口同音に言う。

実感である。

最初は、へ？ と思ったが。

日本ではおとなが、特に人前で泣くのはみっともないというかはしたくないとか、要するに感情の抑制が効かない、あんまりよろしくないことのように言われる。儒教の影響だろうか。このごろ泣いてばかりいて、と言おうものなら、「まあそんなに泣かないで」というひとはいても、「そうよ、泣きなさい」というひとは少ない。わたしは元々涙腺がゆるく、悲恋小説を読んでいたさえジワリ、ポロリ、というほうだが、確かにある時期泣きまくったあとは、ずいぶん気が晴れた。

そして幸いなことに、医者にぶちまけたころから、薄紙をはぐように、というがまさにそのとおり、劇的な変化とはほど遠いが、少しずつこしずつ、1週間ごとにからだは軽く楽になっていくのが、はっきりとわかりだした。その次の週、そう告げると、あまりの現金さに3人の医者がいっせいに声をあげて笑いだした。

「ほら、長くは続かないって、ぼくが言ったとおりだろう？ ね？」